地域活動を対象とした参画型ボランティア活動
—学校教育を基盤にした共同体再生の取り組み—

藤原靖浩
（関西学院大学大学院）

【要旨】
子どもの自立には、家庭・学校・地域社会の支援が必要不可欠である。しかしながら、現代の家庭・学校・地域社会は、大きく変化し、子どもを支援する力を失っている。そのような状況を改善するためには、学校内外において、共同体の再構築を行うことが急務である。そのためには、子どもの集団活動を重視した特別活動を充実させることが求められる。本研究では、子どもが特別活動で培った話合い活動の力などを活用して、地域社会で行われる活動に自主的かつ自発的に取り組んだ参画型のボランティア活動の事例について検討していく。そして、子どもが特別活動で培った力を生かして地域活動に関わる中で、共同体再生を目指した取り組みについて実証的な研究を行う。

1. 問題と目的

学校教育の目的は、教育基本法第5条2項に示されているとおり「各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培い、また、国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うこと」[1)]にある。そのためには、子ども一人ひとりの資質を伸ばすための環境の整備や興味関心の把握をはじめとした的確な子ども理解が重要になる。また、子どもの自立を支援するために、基本的な生活習慣、規範意識、安定した情緒、協同の精神、体力、読み書き算盤の基礎知識と技能を身につける機会を保障することが必要である。つまり、子どもが自立するためには、他者の支援が必要不可欠であり、その発展に寄与する場が家庭・学校・地域社会なのである。

現代の家庭・学校・地域社会は、大きく変化し、子どもを支援する力を失っている。子どもの生活の基本となるべき場所である家庭は、少子化、核家族化、晩婚化、共働きの増加等の影響でその機能を低下させている。また、地域社会は人間関係が希薄化したことによって、かつてあった地域の教育力を維持することが困難になっている。このような家庭と地域社会の現状は、学校に対する期待を増大させ、学校が子どもの教育に占める割合を増加させ、「学校機能の肥大化」[2)]と呼ばれる状態を引き起こしている。その結果、子どもの生活における学校の比重が増加し、学校に苦痛や居心地の悪さを感じる子どもや学校に行くことに喜びを見出すことができない子どもが増加している。

このような学校教育の状況を改善するためには、学校内外において共同体の再構築を行うことが必要である。佐々木も共同体について「子どもが真に自立するためには、共同体としての家庭、地域、学校の構築がどうしても必要である」[3)]と述べ、その重要性を指摘している。このような共同体の再構築を推進するためには、特別活動を充実することが必要である。特別活動の目標は、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、

実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」[4]と示されており、集団活動を重視した教育を行うことに特質がある。特別活動では、学級・ホームルーム活動、児童会・生徒会活動、学校行事等を通して、望ましい集団、個人的な資質、社会的な資質、自主的・実践的な態度等、一人の人間として自立した社会の一員となることを援助している。そして、学校教育現場では 35 時間（小学校 1 年生は 34 時間）という限られた時間の中で、各学校の特色ある実践を行っている[5]が、現在のところ十分な特別活動の時間を確保することは困難である。それゆえに、学校は、授業時間の不足を補うべく、より広く家庭や地域社会を含む共同体の一員として、緊密な連携を計ることが必要なのである。

以上の点を踏まえて、本研究では、特別活動を基盤として、地域社会で行われる活動に子どもが自主的かつ自発的に取り組んだ参画型のボランティア活動の事例について検討していく。そして、子どもが特別活動で培った力を生かして地域活動に関わる中で、共同体再生を目指した取り組みについて実証的な研究を行う。

2. ボランティア活動と地域活動

特別活動は、学校行事の項目において、勤労生産・奉仕的行事の推進を掲げている。そして、勤労生産・奉仕的行事のねらいとその内容は学習指導要領第 5 章の 2 において「勤労の尊さや創造することの喜びを体得し、職場体験などの職業や進路にかかわる啓発的な体験が得られるようにするとともに、共に助け合って生きることの喜びを体得し、ボランティア活動などの社会奉仕の精神を養う体験が得られるような活動を行うこと」であると示されている。ここには、家庭や地域社会をはじめ、関係機関、事務所、企業、ボランティア関係団体、社会教育施設、自治会等との連携を重視することも指摘されており、特別活動が学校内外において、積極的に行われるべきであることが示唆されている。特別活動は地域社会の活動と連続していることが理想的であるが、現在学校で行われている特別活動は、各活動が独立しており、子どもの能力を充分に育むことが困難である場合が多い。この意味において、現在の地域社会には子どもが特別活動を通して育んできた力を実際に活用していく機会を保証することが必要なのである。

なお、本研究では、奉仕活動についてボランティア活動を包括した概念であるとして、子どもが自発的かつ自由に活動を行うことをボランティア活動と捉える。奉仕活動は、自発的に行われる場合と拘束されて行う場合があり、ボランティア活動こそが子どもの自主性・自発性を伸ばし、社会の一員として成長させる効果的な活動であると考える。そこで、本研究では奉仕活動ではなく、ボランティア活動という言葉を用いて表記する。

(1)ボランティア活動の歴史的展開

「ボランティア元年」とも呼ばれる 1995 年以後、ボランティア活動の重要性が声高に語られるようになった。阪神淡路大震災の復興ボランティアに約 130 万人が参加したこと、この震災以後に行われたボランティア活動に若い世代が積極的に参加するようになったことで、ボランティアに対する人々のまなざしが大きく変化したことがその要因である。2011 年に起こった東日本大震災では、マスメディアを通して、世界各国に被災の様子が報道され、多くの人々が復興支援に尽力した。その支援は現在でも継続され、着実に復興が進んでいると言われる。

現在、ボランティア活動は、世界的に広がっており、日本国内外を問わず、その分野も多岐に渡る。そして、子どもがボランティア活動に取り組むことは、人間関係形成能力や自主的、実践的な態度を育てること、ボランティア活動を今後生涯に渡って継続するための契機となることが期待されている。

(2)ボランティア活動と特別活動

特別活動では、ボランティア活動を学級・ホームルーム活動及び生徒会活動で行う社会参加の1つと位置づけている。学校教育におけるボランティア活動は、他校との交流や地域住民との交流を通して、「社会の一員であるということの自覚と役割意識を深め、人間尊重の精神に立って社会の中で共に生きる豊かな人間性を培うとともに、自分を見つめなおし自己実現に向かって人生を切り拓く力をはぐくむ」[6]ことが意図されている。子どものボランティア活動は、自己実現や生きる力の育成に貢献すると考えられているのである。

しかしながら、これまで学校教育現場で行われてきたボランティア活動は、多くの場合、教師が準備・計画した学校行事に参加するものであった。これは、ボランティア活動を計画的に行わざるを得ない学校教育の必要性から生じる課題である。しかし、子ども自らがボランティア活動を経験し、ボランティア活動の企画段階から実施、運営、振り返りを行うことは、ボランティア活動に対する意識を培う重要な機会である。それゆえに、地域社会は学校教育現場で培ったこの意識をより高め、子どもたちが主体的かつ自発的に参画できる活動場所を準備しなければならない。そこでは、単に活動に参加する形のボランティア活動ではなく、子どもの意欲を高めるとともに、ボランティア活動に楽しみを感じられる参画型のボランティア活動を推進することが必要である。ここでいう参画型とは、次の4点を重視した活動とする。①子ども自身で活動を企画・実行する、②活動の内容を決定する話合い活動を重視する、③活動ごとに振り返りを行い子どもの能力を育み高める施策を行う、④子どもの将来の進路や職業に影響を与える体験や経験を積むことができる。

(3)参画型ボランティア活動の意義

ロジャー・ハート（Roer A.Hart）は、子どもが自主的かつ主体的に活動に参画することによって高い能力が得られるとして、子どもを取り巻く物理的環境と子どもの発達に焦点を当て、「参画のはしご（The Ladder of Participation）」という概念を提唱している。「参画のはしご」は子どもの社会参画を8段階に分けて表記したものである[7]。（**図1**）子どもの社会参画は、子どもにお菓子等の報酬を与えることで活動に登場させる「1.操り参画」（「欺き参画」とも呼ばれる）に始まり、活動には居るものの子ども自身が活動の意味や意義を理解していない「2.お飾り参画」、「3.形式的参画」へとはしごを登っていく。ロジャー・ハートによれば、1～3までの段階は、子どもが活動の意味や意義を十分に理解していないため、参画ではないとみなされている。そして、「4.与えられた役割の内容を認識した上での参画」より

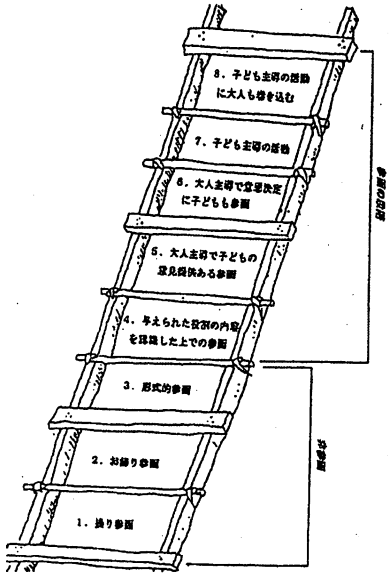

図1：参画のはしご

上の段階が「参画の段階」である。はしごの上に上がればあがるほど、子どもが主体的に関わる度合いが大きいと言われる。ただし、ロジャー・ハートの考え方によれば、4〜8までの段階には差は無く、段階が上に上がれば上がるほど良いというわけでない。また、この段階は自然に上昇していくものではない。活動状況や子どもの発達段階によって適宜選択されるものである。つまり、活動ごとに子ども一人ひとりが自分はどの参画の段階で活動を行うべきかを選択することが可能である。リーダーシップを発揮する子どもも入れば、他の子どもの支援に回る子どももいるだろう。この「参画のはしご」の考え方によれば、活動ごとに子どもが自分の役割を自分で決定することができるのである。

ロジャー・ハートは「子どもたちは、直接に参画してみてはじめて、民主主義というものをしっかり理解し、自分の能力を自覚し、参画しなければならないという責任感を持つことできるようになる」[8]ことを指摘したうえで、あらゆる社会的活動と物理的環境をつくり出す上で、子どもの参画が必要不可欠であることを述べている。つまり、学校や地域社会に求められていることは、子どもにあらゆる参画の段階を経験させることができるような多様な活動を行うことができる場と機会を提供することなのである。

(4)参画型ボランティア活動と共同体再生

子どもは集団の中で身近な人々と接することで、自分の存在を確立していく。それゆえに、子どもにとって集団とは、社会的な自我を形成する基盤であり、欠かせないものである。子どもの最も基本的な集団は家族であり、きょうだい、近い年齢の友達等、クーリーのいうところの第1次集団である。その中でも特に大切なことは、子どもが近い年齢の友達と触れ合う中で、お互いの意見をぶつけ合ったり、折り合いをつけたりすること、他の子どもと自分を比べることで自分の存在を確認したり、相手の存在を認めることである。また、子どもは集団の中で、規範意識や道徳を培い、自分の住む地域社会独自の文化や風習をはじめ、様々なことを学び、成長していく。かつて、共同体は地域社会の中で上述の機能を果たす重要な場所であった。しかしながら、家庭の機能低下や地域社会の人間関係の希薄化等によって、共同体は失われつつある。現在、子どもにとって、学校は共同体を体験することのできる唯一の場となりつつある。それゆえに、望ましい集団形成を軸とする特別活動は、子どもたちが共同体を体験する上で重要な役割を担っている。しかしながら、限られた特別活動の時間数の中では、子どもに共同体を体験させることは困難である。

地域社会は既述の内容を踏まえて、子どもたちが特別活動で体験した共同体を実際の地域社会で体験する機会を準備することが必要である。参画型ボランティア活動は、様々な世代の子どもが話合い活動を通して活動を自主的に計画することで、子ども同士の望ましい集団の形成を行い、子どもの主体性を育み、様々なボランティア活動を通して、将来社会へ出ていくために必要な力（コミュニケーション能力、企画力、課題発見力等）を身につけることを意図している。この意味において、参画型ボランティア活動は特別活動の延長線上に位置づけることのできる活動であり、地域社会で失われつつある共同体の再生につながるものである。

3. 参画型ボランティア活動の実践事例

本研究における参画型ボランティア活動は、子どもに多様な経験を提供するために、学校教育現場や地域社会において実施されることが求められるボランティア活動である。こ

こでは、既述の問題意識に基づいて、兵庫県神戸市北区唐櫃台地区で行われた参画型ボランティア活動の実践を取り上げる。唐櫃台地区では 2010 年より青少年の健全育成を目指した参画型ボランティア活動が行われており、本地区に住む中学生、高校生、大学生を中心に積極的な地域活動への参画が見られる。本研究ではその活動を特別活動で育み高めてきた能力を生かす本番であると捉え、参画型ボランティア活動を通して子どもが成長する様子について検証していく。

(1)対象地域

兵庫県神戸市北区唐櫃台地区は、六甲山の中腹に位置し、観光地としても有名な有馬温泉に並立している。唐櫃台地区は、幼稚園、小・中学校、公立高校が同じ地域にあり、幼小中の期間は生徒もそのまま進学し、引っ越し等の事情が無ければ、他の地域から子どもが入って来ないという昔ながらの環境にある。また、2012 年より市営住宅の建て替え工事が行われる等、今後も住民が増える可能性が高い地区である。しかしながら、ここ 10 数年の間に唐櫃台地区では、夏祭りの中止等地域活動が減少する傾向にあり、共同体としての機能が十分に果たせていない状況が見られる。

このような現状を鑑み、筆者は唐櫃台地区で子どもと関わる団体（学校園、ふれあいまちづくり協議会、青少年育成協議会[9] 等）が行っている地域活動を活用した参画型のボランティア活動を実践することを提案した。また、これまでの地域活動は、幼児および小学生の子どもを対象としたものがほとんどであり、中学生・高校生・大学生の姿を確認することはできなかった。これには、中学生は部活動中心の生活を送っていること、高校生・大学生は自分の住んでいる地域から離れた場所へ行く機会が多く、地域社会に対する気持ちが離れてしまっていること等の原因が考えられる。しかし、共同体再生のためには、地域社会に住む子どもたちが、自分の住む地域社会に興味・関心を持ち、地域と関わることが自己の成長につながることを実感することが必要である。

筆者は、現在唐櫃台地区で行われている地域活動、特に学校と地域社会が連携できる活動を活用し、地区在住の中学生、高校生、大学生に新しい活動の場と機会を提供する参画型ボランティア活動を導入した。特に、青少協の行う地域活動は、地域ぐるみで異年齢・異世代交流や体験活動を推進し、「自尊感情などの豊かな心や健やかな体を育む」[10]ことを主たる目的としており、特別活動で育んだ力を活用した参画型ボランティア活動を行う格好の場であると考えた。

(2)実践内容

参画型ボランティア活動は「①導入→②話合い活動→③準備→④実践→⑤振り返り」という手順で実践される。「①導入」では、地域社会の諸団体や行政等の依頼、子どもたち自らが提案した活動を主張する等の方法で集めた活動について、子どもたち自身の意思で参加・不参加を検討する。導入の部分で最も大切なことは、子どもたちの意思を尊重することであり、大人からの強制や意図的な働きかけをせず、その活動に参画することでどのように他者に貢献できるのか、そして自分たちがどのように関わり、成長できるのかについて子どもたち自身で決定させる。子どもたちは「活動をしない」という選択をすることもできるが、その理由を明確に他者に伝えることができなければならず、自分の意思を明確することの必要性を学ぶことができる。「②話合い活動」は、学校教育において学級会・ホームルーム活動、生徒会活動等すべての特別活動の基本となる活動である。話合い活動は、

国語教育の中にも組み込まれているが、特別活動における話合い活動は、正しい話合いの方法を子どもに教え込むだけでなく、学級で起こる身近な問題の解決を通して、話合いにおける子どもの思考力を高め、自分の意見をはっきりと主張することや相手と折り合いをつけることを教えている。子どもは小学校6年間を通して、話合い活動の基礎を学び、技術等については習得の個人差はあるものの、全員が話合い活動を経験している。中学校・高等学校では、小学校で培った話合い活動の力を活かして、ホームルーム活動や生徒会活動を行うことが期待されている。しかしながら、特別活動の 35 時間という時間的制約と学校による活動の差が顕著であり、必ずしも話合い活動を十分に経験できる場が提供されていない現状がある。それゆえに、参画型ボランティア活動では、話合い活動を重視することで、子どもの話合い活動の体験を積み重ねていくことを意図している。特に、参画型ボランティア活動では、学級単位で行われる話合い活動では体験できない異年齢の話合い活動を実現することができ、小学生から大学生まで様々な世代が交流することができる場を設定することが可能である。

話合い活動で決定した内容を実践するためには「③準備」が非常に重要である。準備は話合い活動と並行して行われ、問題やお互いの意識を高めることがねらいである。また、準備の中で様々な仕事を協力して行うことでお互いの絆を深めることができ、望ましい集団の形成を自然な形で行うことができる点に利点がある。「④実践」を行った後には、「⑤振り返り」を行うことが大切である。子ども一人ひとりに対する評価はなく、活動に参画した子どもたちに賞賛を与えることを重視する。また、活動を通して発見した問題点を共有し、次の活動へと活かしていくことはもちろん、賞賛を与えることで子どもたちの活動への意欲を高めることが期待される。

以上の5段階を繰り返すことで、子ども同士の交流が増え、協調性や主体性をはじめとした社会に出るために必要な力を身につけることが可能となる。

(3)事例と評価

本研究では、兵庫県神戸市唐櫃台地区で2011年度、2012年度を通して継続的に行われた参画型ボランティア活動のモデルケースとしての事例をとりあげる。2011 年度から2012年度にかけて、「からポンフェスティバル」「からとの子どもたちの芸術祭」「凧あげ大会」「北区青少年フェスタ」等をはじめ、2年間で20回以上の地域行事において参画型ボランティア活動を実施した。それぞれの活動に対して、[①導入→②話合い活動→③準備→④実践→⑤振り返り] が行われた。なお、本研究では、参画型ボランティア活動を通して、子どもがどのような力を育み高めたのかについて検証するため、「②話合い活動」及び「⑤振り返り」の度に「話合いに関するアンケート調査」に記入してもらった。アンケートへの記入は、子どもに各話合い活動のつながりを実感させるというねらいがあり、自分ができたこと、できなかったことを振り返ることで自分の役割を実感し、自己有用感を高めることが期待される。なお、質問内容は、『特別活動における発達課題と評価についての研究』[11]で使用されている質問紙を基に特別活動を通して育まれることが期待される能力として、「Q1 話し合い活動」「Q2 集団活動」「Q3 評価・振り返り」「Q4 自分に関する内容」「Q5 集団に関する内容」「Q4-1～Q4-4 自尊感情」「Q4-5～Q4-9 共感性」「Q4-10 キャリア形成」「Q4-11 逆転項目」「Q5-1,2,5,9,10 集団満足感」「Q5-3,4,6,7,8 集団参与」まで、合計41個を作成した。また、各質問項目について4段階評定（「3.できる」「2.まあまあでき

る」「1.あまりできない」「0.できない」）で回答を求めた。（具体的な文言については図 2）なお、結果はすべて単純集計で算出している。

Q1 話合い活動	Q4 1～4 自尊感情
Q1-1:私は、話合いで意見を出すことができます。	Q4-1:私には、よいところがあります。
Q1-2:私は、みんなの前で発表や発言をすることができます。	Q4-2:私は、自分のことを大切だと思っています。
Q1-3:私は、他の人の意見をきちんと聞くことができます。	Q4-3:私は、人の役に立っていると思います。
Q1-4:私は、他の人の意見を大切にすることができます。	Q4-4:私には、自信をもってやれることがあります。
Q1-5:私は、他の人の意見に自分の意見を述べて、つないだり深めたりすることができます。	Q4 5～9 共感性
Q1-6:私は、話合いで出されたいくつかの意見をまとめることができます。	Q4-5:私は、やる気になれば、だいたいのことはできると思います。
Q1-7:私は、話合いで司会をすることができます。	Q4-6:私は、悲しんでいる人を見ると、悲しい気持ちになります。
Q1-8:私は、あとで他の人が読んで理解できるように記録することができます。	Q4-7:私は、困っている人を見ると助けたくなります。
Q1-9:私は、話合いの大切なことや発言を適切に板書することができます。	Q4-8:私は、楽しそうな人を見ると、楽しい気持ちになります。
Q2 集団活動	Q4-9:私は、自信のなさそうな人を見ると、はげますそうという気持ちになります。
Q2-1:私は、学年が違う人と活動をすることができます。	Q4-10 キャリア形成
Q2-2:私は、みんなで決めたルール（きまり）を実行することができます。	Q4-10:私は、将来の夢や目標について考えています。
Q2-3:私は、活動のときにみんなをまとめて活動することができます。	Q4-11 逆転項目
Q2-4:私は、必要なときに人に頼むことができます。	Q4-11:私は、自分のことが好きではありません。
Q2-5:私は、リーダーの人を助けて活動することができます。	Q5-1,2,5,9,10 集団満足感
Q2-6:私は、決まりや時間を守って活動することができます。	Q5-1:私のグループには、よいところがあります。
Q2-7:私は、だれとでも分け隔てなく活動をすることができます。	Q5-2:私は、自分のグループが好きです。
Q2-8:私は、みんなと同じ目標に向けて努力することができます。	Q5-5:私のグループには、楽しいことがあります。
Q2-9:私は、工夫して活動に取り組むことができます。	Q5-9:私は、グループへ行くことが楽しみです。
Q2-10:私は、男女だれとでも仲良くすることができます。	Q5-10:私は、いつまでもこのグループが続けばいいなと思います。
Q2-11:私は、自分の役割（当番や係）を最後までやり遂げることができます。	Q5-3,4,6,7,8 集団参与
Q3 評価・振り返り	Q5-3:私は、グループの役に立っていると思います。
Q3-1:私は、集団の一員として行動することができます。	Q5-4:私は、困っているときグループの人に助けてもらえます。
Q3-2:私は、みんなのために発言することができます。	Q5-6:私は、グループの困っている人を助けてあげることができます。
Q3-3:私は、みんなのために行動することができます。	Q5-7:私は、グループでいやなことがあると心配になります。
Q3-4:私は、後片付けをすることができます。	Q5-8:私は、グループでよいことがあるとうれしくなります。
Q3-5:私は、うまくいかなかったことも受け入れることができます。	
Q3-6:私は、活動を振り返って次の活動に生かすことができます。	
Q3-7:私は、行事などで達成感や充実感を感じることがあります。	
Q3-8:私は、今のグループの一員であると感じています。	
Q3-9:私は、工夫して役割に取り組むことができます。	
Q3-10:私は、共同作業の苦労や喜びをみんなと分かち合うことができます。	
Q3-11:私は、みんなでやらなければならないことに協力することができます。	

図 2：話合いに関するアンケート調査

4．結果と考察

(1)結果

2 年間に渡る活動の結果、活動当初から参加している子どもたちは 100 回を超える話合い活動を経験した。また、2 年間の活動を通して、2013 年 3 月現在、参画型ボランティア活動の話合いには約 30 名の子どもたちが参加している。最年少は小学 4 年生であり、活動開始時に高校 3 年生であった子どもたちの中には、大学へと進学しボランティア活動を継続している子どもも多い。なお、本研究では、過去 2 年間の話合い活動後に記入したアンケートの結果を数値化し、項目別にグラフを作成した。それらの結果の内、特別活動の主たる目的であり、共同体再生のために欠かせない「Q2 集団活動」「Q5-2,4,6,7,8 集団参与」の 2 つの結果を取り上げる。また、活動を継続した結果を示すために、本研究では活動の初期から 2 年間に渡って積極的に活動に参画した 5 名（男子 A、女子 B、C、D、E）に焦点を当てる。

5 名の結果は図 3、図 4 に示している。また、グラフ中に表記されていない部分があるが、それはその子どもが話合いに参加できなかった部分を表している。B については、2011 年 7 月から活動に加わり、C については大学受験のために一定期間の間活動から離れていた時期があった。なお、結果はそれぞれの活動ごとに平均値をまとめており、2.0 超を「高い」と判断し、2.0 未満を「低い」と判断している。

(2)考察

考察は、図 3、図 4 のグラフを用いて行い、全体を概観した結果と個人の結果について、それぞれ検討する。なお、A、B、C、D、E の 5 名は高校 2、3 年生の時から活動を始め、現在は全員大学へ進学後、活動を継続している。

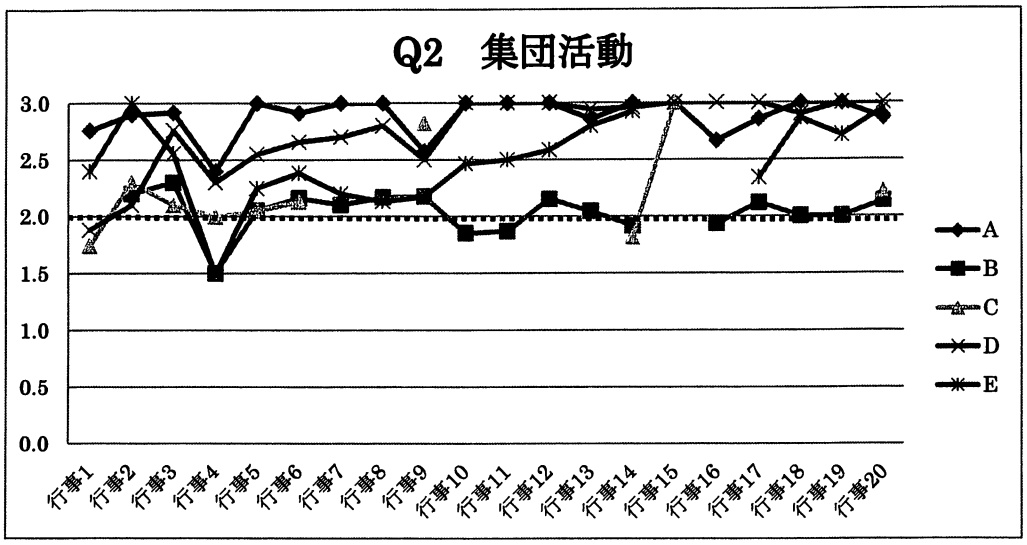

図 3

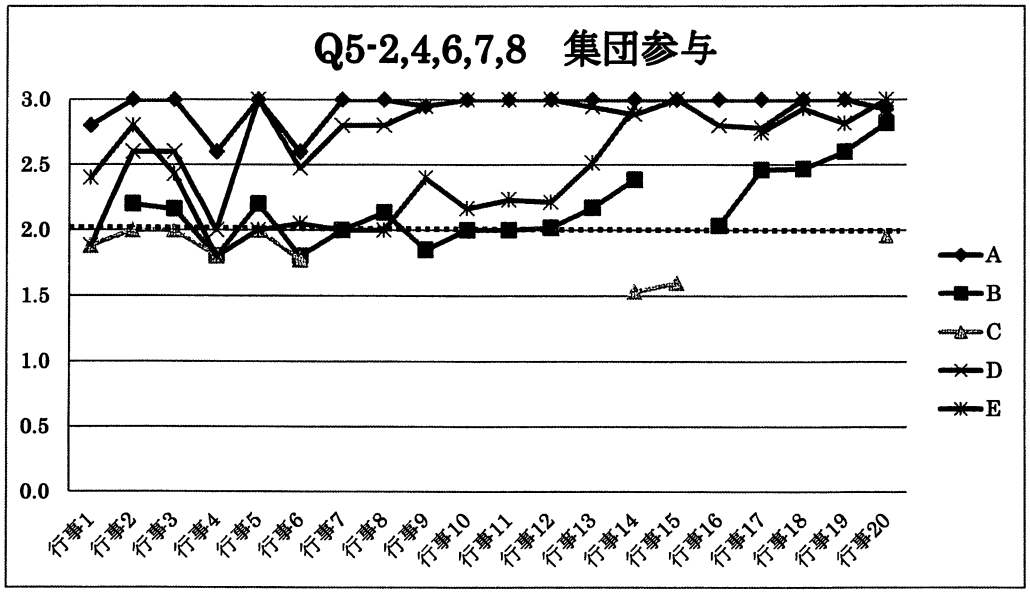

図 4

図 3 の結果を見ると、行事 20 の時点で、全員の値が 2.0 超となっている。これは 5 名が集団活動を「できている」と自己評価していることを示しており、活動を重ねることで彼らが成長してきたことが伺える。値の増減を見ると、行事 10 前後から振れ幅が小さくなっていることが確認でき、C 以外の 4 名は値が 2.0 超で一定になりつつあることが分かる。上述の通り、C は大学受験の関係で活動に参加できていない時期が多かった。そのため、集団活動が十分にできていないと考えていることが分かる。また、C は行事 6 から行事 14 の間に 2.0 超の値から 2.0 未満へと値を減少させている。ここから分かることは、集団活動が活動を重ねることでできるようになる(できると思えるようになる)ものであり、

体験や経験を積み重ねることが重要であるということである。特に、学年や学校も異なる異年齢の交流やリーダーシップ・フォロアーシップの発揮、自分の役割を発見し、協力して問題に取り組む姿勢等は、一朝一夕に培われるものではなく、体験と経験によって身につけることができるのである。これは、**図4**の結果にも顕著に現れている。

個別の結果を見ると、**図3**で顕著に値の変化が確認できたのはDである。Dは2013年4月現在、大学2回生であり、ボランティア活動を行う際のリーダーとして活躍している。中学生時代に生徒会副会長を経験している明るく、社交的な性格の持ち主である。しかしながら、高校時代はリーダーとして活動する経験が少なく、話合い活動等の経験も少なかった。話合い活動を始めた当初は、発言も少なく、他のメンバーにリーダーを譲り、サポートに回ることが多かったが、行事5の時に初めてリーダーを任されることになったという経緯がある。行事1の時、Dの値は2.0未満であり、行事4までの期間は値がなかなか安定していなかった。しかし、Dはリーダーとして活動するようになってから、値の上昇が目立つようになる。リーダーとして活動を成功に導くために部活動や勉強とボランティア活動を両立し、話合い活動の事前準備等にも力を注いだ。Dは行事10で初めて集団活動の値が3.0になった。行事10は地域で行われた「凧あげ大会（2012年1月開催）」であり、これまで高齢の方々が運営するものであったが、2011年から参画型のボランティア活動に協力して頂き、中学生・高校生を運営の中心に置くようになった。Dは「リーダーとして会全体の統括を行い、行事を成功に導いたことで自信を持つことができた」と反省会や振り返りの際にも述べており、これ以降の活動でも高い値を維持している。

図4の集団参与は、自分の所属する集団に対する意識であり、グループの中で自分の役割を自覚し、グループを信頼しているかどうかを計っている。これは共同体を再生し、維持していく上で重要な要素であると考えられる。活動を継続したA、B、D、Eの4名は、それぞれ値が変動した時期はあるが、最終的に3.0に近い値となっており、全体的に見て2.0を超える値となっている。これは、活動を継続することで集団に対する意識は高まり、お互いの存在を認め合う関係が築けていると考えることができる。Cも活動から離れている時期はあったものの行事20では2.0となっており、一定のレベルで集団に対する意識を高めることができたと思われる。Cは、他の4名と同じ地域に住んでいるが、それ程親しく接している様子はなく、ボランティア活動の中で関わりをもつことがほとんどであった。そのような状況の中、長期間活動を離れていたにも関わらず、Cの値が維持できたことは、参画型ボランティア活動が高い効果を上げていることを示す一例となったのではないだろうか。今後も、事例を積み重ねる中でそのような効果についても検討していきたい。

ここまで共同体再生の基礎となると考えられる「集団活動」と「集団参与」という2つの結果についてグラフ等を用いて検討してきた。その中で、話合い活動の力を活用した参画型ボランティア活動が、将来の共同体の担い手である子どもの意識を育むために有効な方法の1つであることを確認することができた。今後、この活動をモデルケースとして様々な地域で実施していくことで、地域の共同体再生に尽力することができるだろう。

5．今後の課題

本研究の目的は、特別活動を基盤として、地域社会で行われる活動に子どもが自主的かつ自発的に取り組んだ参画型のボランティア活動の事例について検討し、子どもが特別活

動で培った力を生かして地域活動に関わる中で、共同体再生を目指した取り組みについて実証的な研究を行うことにあった。そして、「話合いに関するアンケート調査」から「集団活動」と「集団参与」という共同体再生の基礎となる集団づくりに関する結果に焦点を当て、考察してきた。その結果、参画型ボランティア活動は、共同体再生に必要な異年齢の集団づくりに貢献することのできる活動として一定の効果があることが確認できた。

今後は、活動を継続していく中でより、子どもの人数を増やし、さらなる研究の発展に努めたい。また、活動ごとにアンケート調査を作成し、子どもと地域住民の異年齢の交流に関する意識について詳細な研究を進めていきたい。参画型のボランティア活動が将来の地域社会の担い手としての子どもを育くむ一助となることを期待して、本研究を終える。

付記
本研究は、日本学術振興会平成 22 年度科学研究費（基盤研究（C）22531040)、「特別活動における発達課題と評価についての研究」の一部を参考にした。

注記・引用文献

1) 文部科学省『教育基本法』文部科学省、2006 年。
http://law.e-gov.go.jp/htmldata/H18/H18HO120.html（閲覧日：2013 年 8 月 28 日）
2) 学校機能の肥大化」とは、「これまで家庭や地域社会が果たしていた人間関係の形成や生活体験等の役割のほとんどを学校が担う必要性が生じ、家庭や地域社会も学校にそれらの機能を求めるようになること」である。
3) 佐々木正昭『生徒指導の根本問題―新しい精神主義に基づく学校共同体の構築』日本図書センター、2004 年、p.52。
4) 文部科学省『中学校学習指導要領解説　特別活動編』文部科学省、2008 年、p.7。
5) 安井一郎他『児童生徒の社会性を育てる特別活動のカリキュラム開発に関する総合的研究』甲文堂、2005 年。
6) 文部科学省『中学校学習指導要領解説　特別活動編』文部科学省、2008 年。
7) IPA 日本支部・奥田陸子他訳『子どもの参画ーコミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際』萌文社、2000 年、p.42。原著：Roger A Hart, *CHILDREN'S PARTICIPATION:The Theory and Practice of Involvig Young Citizens in Community Development and Environmental Care*, UNICEF,New York,1997.
8) 同上、p.2。
9) 青少年育成協議会（青少協）は「青少年の育成及び青少年を取り巻く環境の整備を進めていくこと」を目的として、昭和 27 年に発足した団体である。
10) 神戸市青少年育成協議会・神戸市『第 18 期青少年育成委員ハンドブック』神戸市少年育成協議会・神戸市、2011 年、p.15。
11) 佐々木正昭『特別活動の発達課題と評価についての研究』、平成 22 年～24 年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）、課題番号：22531040、2013 年。